

告辞に代えて

駒沢女子大学・短期大学長 戸田洋樹

駒沢女子大学、駒沢女子短期大学の卒業生の皆さん、駒沢女子大学大学院修了生の皆さん、そしてご父母、ご家族の皆様、おめでとうございます。しかし、今回の想像を絶する出来事に直面して、私どもとしては、卒業・学位授与の式典の中止を余儀なくされ、もろ手を挙げて皆さんをお祝いできないのが残念でなりません。ただ最初に、被災された方々には、この場をかりて、心よりお見舞い申し上げたいと存じます。

さて、このところ日本では、閉塞感が蔓延しているといわれてきました。それは、日本だけではなく、おそらく、先進国と言われる国のほとんどに当てはまると思われれますが、特に日本では、今回の大災害でこの感情がますます強まっていくことを恐れています。私たちはどのようにすれば、この閉塞感から脱することができるのでしょうか。それとも、この閉塞感から脱する術はないのでしょうか。この問題について、私が日ごろより考えていることを述べて告辞に代えさせていただきたいと思えます。

私たち日本人の閉塞感、それは、先行きが見えない。将来に希望が持てない、という言葉で表現されることが多いわけですが、先行きが見えない、将来に希望が持てないということはどういうことでしょうか。私たちは、この言葉の裏に何を読み取ることができるのでしょうか。

ほぼ二十年前のバブル崩壊後、生活の豊かさというのは、物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさだ。これからは、物質的な豊かさを追求するのではなく、精神的な豊かさを求めるべきだと、さかんに言われたことを記憶しています。物質的に豊かな生活、それは、いうまでもなく、経済の成長・発展を前提とします。生産と消費の拡大、市場の拡大、流通の拡大、道路の拡張と整備、森林伐採や土地の開発といった自然の改造、エネルギー資源の確保や開発等々、いわば経済成長至上主義、開発至上主義の徹底です。先進国と言われる国々は、そしてその仲間となった日本という国も、これによって、物質的に豊かな生活を謳歌してきたわけですが、日本では、ほぼ二十年前にすでに、それは行き詰った、破綻した、だから、これからは物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさが求められているのだ、と言われたわけです。

ところで、先行きが見えない、将来に希望が持てないという言葉の裏に何を読み取ることのできるかということですが、それは、今言いましたような、バブル崩壊後の反省にもかかわらず、私たちは依然として、物質的に豊かな生活をもたらす経済の成長・発展に夢を抱いている。今までより以上の成長・発展はありえないとい

うことを認識していながら、それにもかかわらず、依然として、物質的な豊かさをもたらす成長・発展に郷愁を感じている。要するに、これまでのような経済的成長・発展はないという現実の認識と、経済的成長・発展への淡い期待とのジレンマが、先進国日本の閉塞感として現れている、というのが、私の理解なのです。

この閉塞感から抜け出すにはどうすればよいのでしょうか。さらなる成長・発展に期待して物質的な豊かさを追求する限りは、この閉塞感から脱するどころか、どんどん深みにはまっていくでしょう。では、どうすればよいのでしょうか。それには、経済の成長・発展を最も重要なものとするものの見方、考え方を捨てることです。先進国日本の経済的成長・発展はすでにピークを過ぎました。今までより以上の成長・発展は期待できません。そのことは、先ほど言いましたように、私たち日本人がすでに二十年前に認識していたはずで

さて、最近、パラダイムの転換ということをも主張する論者が出てきました。パラダイムという言葉は、かつてトーマス・クーンという科学史家が用いた言葉ですが、今では一般化されて、ある時代において支配的なものの見方・考え方という意味で使われるようになりました。したがって、パラダイムの転換というのは、これまで支配的であったものの見方・考え方を、別のものの見方・考え方に変えることです。私もパラダイムの転換という考えに賛成です。私たちは、経済の成長・発展を最も重要なものとするものの見方・考え方を捨てて、別の新たなものの見方・考え方を確立しなければなりません。では、新たなものの見方・考え方とはどのようなものなのでしょうか。それには種々のものが考えられると思いますが、私は、先進国の日本人として確立すべき新たなものの見方・考え方としては、唯一これしかないと言うわけではありませんが、「共生」、すなわち「共に生きること」というパラダイムをあげたいと思います。「共生」という言葉は、月並みで目新しくはありませんが、これまで経済的成長・発展の恩恵を受けてきた先進国の一つ、日本という国の成員として、少なくとも私たちに必要なのは、「共生」の思想だと考えるからです。

「共生」というのは、もともとは、生物の種同士の生きる関係について言われる生態学上の概念なのですが、ここでは、「共生」という言葉の意味を、より限定して、利他的な相互依存の関係のなかで共に生きる、互いに他者のことを配慮しながら共に依存し合って生きる、という意味とします。

私たち日本人は、年齢、男女、能力、考え方、立場、職業、貧富、その他、それぞれの人の持つ数限りない違いを認めつつも、それにとらわれることなく、日本という同一の国のなかでお互いに共生することができます。日本という国は、民族、法律、政治、経済、文化、風俗習慣、その他それぞれの国の数限りない違いを認めつつも、それにとらわれることなく、アジアという同一の地域のなかで、さらには、地球という一つの世界のなかで他の国々と共生することができます。そして、私たち一人ひとり、地球上のすべての人々と、それぞれの人の数限りない違いを認め

つつも、それにとらわれることなく共生することができます。さらにまた、この地球上に住む人間は、人間同士だけではなく、地球上の生物種のすべて、また、自然として存在するもののすべてと共生することができます。

結局のところ、私は、この二十一世紀において求められている重要なもののひとつは、「共生」、すなわち、地球上の全存在者が利他的な相互依存の関係のなかで共に生きる、すなわち、互いに他者のことを配慮しながら共に依存しあって生きるというパラダイムを確立することである、と考えるわけです。ただ、そのためには種々の条件が必要です。その条件のすべてがととのわなければ、全地球的規模での「共生」の実現は困難であるのかもしれませんが。しかし、仏教主義の学園、駒沢学園で学んだ皆さんには、幸いにも、その条件の最も重要なものの一つとなりうるものを具えていると思います。僭越ながら言わせていただきますが、それは、慈悲の心、慈しみ悲しむ心です。

「慈悲」の心といっても、いわゆる憐憫の情、弱いものに対する憐れみの情だけではありません。弱いものに対する憐れみの情も必要なものでありますが、「慈悲」とは、文字通りの意味で「慈しみ悲しむ」、すなわち、人間であれ、人間以外のものであれ、自分が関わる相手の幸せを望み、相手の苦しみを取り除いてあげたいという気持ちです。相手が幸せであれば、自分も幸せであり、相手が苦しんでいれば、自分も共に苦しみながら、共にそれを克服しようという心です。相手が弱者であったり、人間以外の生物であれば、これに憐れみの情が加わることでしょう。そして、この「慈悲」の心をどのように具体化するか、それは皆さん一人ひとりが、この学生生活のなかで培った知識・知恵を糧にして、どのように実践するか、行動するかにかかっています。もちろん、実践する、行動するといっても、私たちを含め、皆さんに出来ることは、この日常生活を送るなかで自分に身近な相手に向けて行うことなのですが、ただそのようなある意味でささやかで地道な行動が、最も必要とされるものだと確信しています。いずれにしましても、仏教主義の本学園で学んだ皆さんには、「共生」のための最も重要な条件の一つ、「慈悲」の心をしっかりと身につけて、有意義な社会生活を送っていただきたいと思います。

最後に、皆さんの今後のご活躍を祈念して、告辞に代えさせていただきます。